

点一閃光

——A. N. ホワイトヘッドの「エポック的持続」にみる写真の意味——

圓井義典

写真学科

Point-flash:

The Meaning of Photography, as “an Epochal Duration” by A. N. Whitehead

MARUI Yoshinori

Department of Photography

(Received October 31, 2014 ; Accepted December 18, 2014)

Abstract

In this paper, I explored why Photography has kept attracting the people since the 19th century to this day. We are still using Photography even with many devices, which are connectable to not only the visual perception but also other various perceptions, that have been developed.

Why? The key is the idea “an epochal duration” and “an event” by Alfred North Whitehead. In *Science and the Modern World*, Whitehead views not only all things, such as stones or atoms or our own bodies, but also our minds as “an event” which gathers many patterns. In addition, he says, “The pattern requires a duration involving a definite lapse of time, and not merely an instantaneous moment” and “A duration, as the field of pattern realized in the actualization of one of its contained events, is an epoch, i.e., an arrest”. If the duration of the pattern does not exist, any event, as a gathering of things into the unity of a prehension, cannot exist. Moreover, Whitehead says that realization of an event is the becoming of time in the field of extension.

If we view both photographs and our minds as “events” by Whitehead, we will recognize that the moment, when we take or see a photograph, is just “an epochal duration” which divides our time from space.

1. 序文

本論の目的は、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの「エポック的持続」という概念をもとに、すでに多くのより高度な記録媒体が日用品化しているにもかかわらず、この二十一世紀にいたるまで存続することのできた

写真の魅力を理解する手がかりを探ることにある。

人の手によらず、光そのものを定着させるという、画像生成から定着までのプロセスの総合体としての「写真術」の発明以来およそ二世紀の時を経て、科学技術の一層の発達と共に写真のあり様も大きく変化してきた。

いうまでもなく、インターネット、SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）、スマートフォンをはじめとするさまざまな新しい技術によって、特別な知識や技術を用いることなく、視覚だけではなく複数の知覚と関連させることのできる情報を、一度に記録／加工／編集／再現／再生でき、かつ複数の人びとと手軽にそれらを共有できる環境が整備される中で、家族ひとりひとりの生涯の記念としての婚礼写真や肖像写真、あるいはイメージによって作者¹⁾のメッセージをできるだけ多くの人々に伝えることを使命とする報道写真といった、これまで職業として社会において機能してきた写真の存在意義が問われ直す契機が生まれることと並行して、そのような職業としての写真ではなく、誰でもが楽しめる何気ない日常の記録として、また家族や友人といった身近な人々だけではなく、時に SNS やブログなどを通じて、見ず知らずの他者に向けてのメッセージ発信の素材として、かつてない規模で人々が写真を扱う時代ともなった。

このようにして時代とともに姿を変えつつも未だに写真という一枚の静止画像が他のメディアに置き換わることなく社会において機能しているとするならば、それはなぜであろうか。

本論においては、作家論や写真の制度論や形式論、写真と社会を結びつける倫理といった、いわばバルトのストゥディウムの範疇に含まれるであろう視点からの写真分析をあえて大きく逸脱し、より始源的ともいえる現象学的あるいは形而上学的視点から写真を観察してみたい

と思う。

2. ホワイトヘッドの「有機体の哲学」が生まれた時代背景

ホワイトヘッドの思想的活動は大きく三つの時代に分けることができる。第一の時代は、ラッセルとの共著『数学原理』に代表される偉大な数学者あるいは数理哲学者としてのケンブリッジ大学時代であり、次の時代が『自然認識の諸原理』、『自然という概念』、『相対性原理』を著した科学哲学者あるいは自然哲学者としてのロンドン大学時代、そして第三の時代が、ロンドン大学を定年退職したのちに六十歳をこえて哲学科教授として招聘された、ハーバード大学の時代である。このホワイトヘッド第三時代の幕開けとして、渡米後最初に著した哲学書『科学と近代世界』(*Science and the Modern World*, 1925)は、続く大著『過程と実在』(*Process and Reality*, 1929)と『観念の冒険』(*Adventures of Ideas*, 1933)を合わせた三部作の第一部に位置づけられ、出版されるや否やまたたく間にアメリカの哲学界だけでなく一般の読者からも好評を博した²⁾。

『科学と近代世界』において、ホワイトヘッドはデカルトの「思惟」(cogitate)を本性とする精神と「空間的延長」を本性とする物質の二元論が近代の科学的な図式の基礎であり、それが「科学的唯物論」と呼べるものに収斂したとみなす³⁾。

配列が絶えず変動しながら空間全体に拡がっている、原理にまで還元し難い非情の物または物質を、究極の事実として前提している。そのような物質はそれ自身としては無感覚、無価値、無目的である。それは、その存在の本質から発生しない外的関係によって課せられた一定の軌道を辿って動いているにすぎない。わたくしは、まさにこのような考えを「科学的唯物論」(scientific materialism)と呼ぶのである⁴⁾。

この科学的図式は抽象観念の進歩には有効であるが、ひとたびその領域の外に出てしまったならば、その抽象化された高度な観念は瓦解するにもかかわらず、十八世紀にいたり、あらゆる自然現象を機械論的に説明するという考えがドグマ化した⁵⁾。しかしそれは「具体者置き違いの虚偽」(Fallacy of Misplaced Concreteness)⁶⁾の最たるものであり、火急に検証すべき課題であるとホワイトヘッドはとらえる。

3. ホワイトヘッドによる事物の新たな考え方

そこでホワイトヘッドは、この精神と物質の二元論をさらに一步進め、精神と物質を「有機体」(organism)という基本概念の上に再統合することを目指す。

体積は空間のもっとも具体的な要素である。しかし、空間の分離的特性は体積を部分体積に分解し、このことはいくらでも続けられる。したがって、われわれが分離的特性を孤立させて見る場合には、体積というものは体積のない要素の、実際には点の、単なる集積にすぎないと推論すべきである。しかしながら、根源的な経験事実は体積の統一性である。例えば、大きい体積をもったひとつの講堂の空間がそれである。この講堂を点の単なる集積と見るとき、それは論理的想像の築き上げたものである⁷⁾。

この経験事実と論理的想像との分離こそ、アリストテレスの語る形相と質料、デカルトの精神と物質といった西洋哲学の本性と同一線上にある二分法であり、それらがつまりは科学的な手法の中心概念を形作り、かつその科学図式を精神にも演繹することで、例の人の精神もまた、無感覚、無価値、無目的な物質にすぎないものとみなす科学的唯物論としての二元論へと収斂した、ととらえつつ、さらにこの虚偽を修正し、経験事実にも整合できるように正しく演繹させるための道を探る。

事物は空間によって分離され、また時間によって分離されるが、また空間において共存し、たとえ同時的でなくとも、時間において共存する。わたくしはこの二つの特性を空時の分離的(separative)および把握⁸⁾的(prehensive)特性と名づけよう。なおいまひとつ、空時のもつ第三の特性がある。すべて空間内にある事物は何らかの明確な限定を受ける、すなわち、ある意味ではそれはただそれが現在持っている形のみ持っていて他の形を持たないし、また或る意味ではそれはただこの場所のみに存在していて他の場所に存在しない。時間に関しても同じように、事物はある期間内に存続し、他の期間内に存続しない。わたくしはこれを時間の様態的(modal)特性と名づけよう⁹⁾。

目の前にある事物。それを「科学的唯物論」にしたがってとらえるのであれば、それはナニとは名づけることはできないことになる。なぜなら事物は、論理的には、空

間においてどこまでも分割可能であり、体積を持たない点がたまたま共存する集積にすぎないものとなるからである。しかも、それらの点の集積を時間において分割するならば、やはり空間的な分割によってあらわれた特性と同様に、論理的には時間を持たない点がたまたま共存する集積となる。このような空間的にも時間的にもどこまでも分割可能な性質を「分離的」特性と名づける。

しかし、この論理的には本来ナニとは名づけることのできないはずの事物は、一方で私たちが感覚し把握することのできる特性をも持ち合わせていることから、それを「抱握的」特性と名づける。また、この分離的、抱握的、様態的という三つの特性をもちつつも常に移りゆく、あるものが統一され現実態となった「出来事」(event)ととらえる。石も、宇宙そのものも、そして、私たち自身の物質としての身体だけではなく、私たち自身が知覚し、情念をもち、推理する精神をも同じ視点からとらえることを試みるのだ。

事物を分離的、抱握的、様態的の三つの枠組みでとらえ直すこと。そのことこそ、ホワイトヘッドの形而上学の重要な骨格といえよう。

ホワイトヘッドはさらに続ける。世界のあらゆる事物を(空間的に、時間的に)固定された何ものかではなく、分離的、抱握的、様態的という三つの特性をもちつつも常に移りゆく、あるものが統一され現実態となった「出来事」(event)ととらえる。石も、宇宙そのものも、そして、私たち自身の物質としての身体だけではなく、私たち自身が知覚し、情念をもち、推理する精神をも同じ視点からとらえることを試みるのだ。

万有をうち貫き、実在するものの性格それ自身に内在する一事實は、事実の推移、すなわち、ものが一から他へ移り変わることである。この移り変わりは、離れ離れの存在が単に数列にならぶことではない¹⁰⁾。

現実の出来事(actual event)というものは、独立した成立形態であり、さまざまな存在を、それらがそのパターン内に実在的に共存するがゆえに、ひとつの価値の中に抱き入れ、他のもろもろの存在を除去するものだ、という考えである。それは単にさまざまなものが、単に論理的に共存するものではない¹¹⁾。

この実在的共存とは、各々の内的本質、すなわち各々の永遠的客体¹²⁾それ自身、が出来事の姿をとって現われる一つの限定された価値に関与するようになる、という意味である¹³⁾。

偶然に無感覚、無目的、無価値にではなく、ある価値

に関与することを目的に、事物の相互関与もしくは相互作用によって先行するさまざまな様態が有機的に統合し、統一体としての出来事が形成される。では、物質ではなく、思惟する私たちの精神もまた同じ出来事であるのなら、それはどのようにとらえることができるのか。

精神の知る働きは、ある全体をなすものの反射的経験であって、一つの単一現象として自己が本来何であるかを自ら報知するものと見られる。この単一現象は、その部分における現象の全部を統合したものであって、それらの数的和ではない。それはひとつの出来事として自己自身の統一をもつ。それ自身ひとつの存在と考えられるこの全体的統一体は、もろもろの出来事より成る宇宙のパターン化された諸相を抱握した統一体である。それが自己を知ることとは、それによって抱握される諸相をもつもろもろの事物に自らが関与すること(relevance)から生じる。それは世界を相互関与の一体系として知り、このようにして自己をもろもろの事物に映されたものとして見る。これらの他の事物の中には、それ自身の身体のさまざまな部分も含まれているのである¹⁴⁾。

個人の心理的領域は単に、その個人自身の立脚点から考察された出来事にすぎない。この領域の統一性がすなわち出来事の統一性である。しかしそれは部分の集合としての出来事ではなくて、一つの存在としての出来事である。部分相互の、ならびに部分の全体に対する関係は、それぞれ相手の内に映じた各部分の諸相である。外から観察する人にとって一つの身体は、全体としての身体が、また部分の集合としての身体が、その人に対して示す諸相の集まりである¹⁵⁾。

出来事自らを報知するためのものとして、精神という単一現象が形成される。それは、視覚や聴覚などといった知覚現象ごとの単なる数的和でもなければ、身体機能の単なる数的和などでもない。

それ自身でさまざまな様態としての現象をひとつに抱握した統一体であり、この精神としての統一体が、もろもろの事物に自ら関与することで自らがそこ(関与する対象)に反映される。この精神の様態によって、私たちの外側にある事物を知覚すると同時に、私たち自身の身体を知覚し思惟することができる。

4. 抱握的契機と知覚

さらに、出来事としての精神が知覚するしくみについて、ホワイトヘッドは、出来事を感覚的に知覚するための目標である音や色や感触などを感覚的客体（sense-object）¹⁶⁾ と名づけた上で、以下のようにとらえている。

ある感覚的客体の認識的知覚とは、当の感覚的客体をも含めたさまざまな感覚的客体のもつさまざまな様態を（立脚点 A に）抱握的に統一することの意識である。立脚点 A はもちろん、空間の一領域である。すなわち、ある期間の時間をつうじて在る、ある大きさの空間である¹⁷⁾。

A におけるある感覚的客体の一樣態は（その感覚的客体の A に対する関係をその様態が規制しているのであるが、この感覚的客体を捨象したとき）、A からある他の領域 B を見た相である。したがってその感覚的客体は B において位置を占めるといふ様態をもって A のうちに存在する。すなわち、かりに緑色を問題の感覚的客体とするならば、緑色は単にそれが知覚されつつある A にあるのでもなく、単にそれが位置を占めるものとして知覚される B にあるのでもなくて、B において位置を占めるといふ様態をもって A に存在している¹⁸⁾。

私（立脚点 A）が領域 B に何かを感覚的に知覚するとすれば、それは B において何かが単に空間に位置を占めているからではなく、もろもろの感覚的客体が私（立脚点 A）によって知覚され、それら感覚的客体のもつさまざまな様態をひとつの出来事として統一した上で、領域 B において位置を占めるといふ様態をもって A に抱握されるのだ。さらにそこから次のように演繹する。

現実界はもろもろの抱握より成る一複合体である。ひとつの「抱握」はひとつの「抱握的契機」（prehensive occasion）である。抱握的契機は、それ自体においてかつ独立的に存在するものとして考えられた最も具体的な有限存在であって、決して他のそのような契機の本質に映じたその相から考えられた存在ではない¹⁹⁾。

ある立脚点 A であり抱握的契機であり、存続する有限存在としての出来事のひとつでもある私たちは、他の出来事と感覚的客体を通じて相互に関与する。そしてそれら出来事はいずれも固有のパターンを有しつつ、長い

か短いかわからないが一定期間持続する。現実界とはまさにそのようにして様々な抱握された統一体からなる複合体としての有機体ではないか。

実現は事物が相集って抱握による統一体をなすことであり、またそのさい実現されるものは抱握であってそれらの事物ではない、と考えることができる。この抱握による統一体はひとつのここ・今として限定され、集まって抱握的統一体をなす事物は他のものもろの場所や時間と不可欠な関連をもつ²⁰⁾。

ここ・今における、抱握されて実現した統一体を事物は単にそれ自身としてある城、雲、遊星ではなくて、抱握的統一の空間および時間における立脚点から見た城や遊星である。言い換えれば、ここでの統一の立脚点から見た向こうの城のパースペクティブである。したがってここで抱握されて統一体をなす、城や雲や遊星の諸相である²¹⁾。

こうして具体的事実というのは過程（process）である。それはまず、基体的抱握活動力²²⁾と実現されたもろもろの抱握的出来事に分析される。各々の出来事は基体的活動力の個体化から生じる個々の事実である。だが個体化されたかたちを取るといっても、それが実体として独立したものという意味ではない²³⁾。

確かに私たちはここ・今におけるさまざまな具体的事実を知覚する。それは空間的に位置を占め、また、時間的にも位置を占める事実である。しかしそれらの事実は、私たちが知覚する以前から単にそれ自身としてあったものではなく、それ自身もまた移りゆく諸相のある過程として実現した様態であり、私という立脚点 A が知覚するそれは、あくまでも立脚点 A である私がさまざまな感覚的客体を通じ、統一体として領域 B において空間的に時間的に位置を占めるといふ様態をもって抱握した出来事である、とホワイトヘッドはとらえなおす。

5. 出来事と時間

ある抱握的統一体としての出来事は、そのパターンを持続することによって他の出来事への関与を強めることになる。私たち人間は、このパターンを持続すること、そのことによって諸相をもつもろもろの事物に自らが関与していることを自ら報知するために、反射的経験であり単一現象としてでもある精神をもつ。時間や空間とは、出来事としての精神が、諸々の出来事を抱握す

る様態から導きだした抽象である。ホワイトヘッドは時間について以下の通り描写する。

実現ということは延長の場における時間の生成である。延長は、潜勢態であるかぎりのもろもろの出来事の複合体である。実現において潜勢態が現実態となる。しかしながら、潜勢的なパターンは持続を必要とし、持続はパターンの実現によってひとつのエポックをなす全体として示されなければならない。このようにして時間とは、もともと可分であって接触している諸要素の継起である。持続は、時間的なものと成るときそうなることによって、ある存続的事物の実現をもたらす。時間化とは実現である。時間化は実現と離れた連続的過程ではない²⁴⁾。

パターンが持続し出来事を実現する。このある期間内に存続し、他の期間内に存続しないパターンの存続性によって時間が生まれるのであって、空間や出来事の外に、あらゆる事物にとっての一義的で絶対的な時間がもともとあるわけではない。

存続する事物はもろもろの出来事の内に含まれたもろもろのパターンに関連して、空間を時間から分つのに重要な働きをする。また逆に、もろもろの出来事のうちに含まれたもろもろのパターンにおいて空間が時間から分かれたことは、もろもろの出来事より成る集合体が存続する事物に対して持続することを表わす。存続する事物のない集合体もありうるであろうが、存続する事物に対して特に持続する集合体なくしては、存続する事物はありえないであろう²⁵⁾。

いかなる現実契機もみな過程として現われる。すなわち生成である。現実契機は、このようなものとして現われながら、多数の他の契機と相並ぶ一つの契機である。それは、それら他の契機がなければ存立することができないであろう。それはまた、永遠の客体の限らない領域をその契機特有の仕方一点に凝縮するような、ひとつの特殊な個別的成立形態として限定される。

或る一つの契機 a は、相集って a の過去をつくるもろもろの契機から出てくる。それはそれ自ら、相集まって a の現在をつくる他のもろもろの契機を顕示する²⁶⁾。

この顕示はその契機の生まれた過去によって制約

され、かつ完全に限定されさえするであろう。しかしこのような条件のもとで現在に顕示することは、その契機の抱握的活動から直接創発²⁷⁾するものである²⁸⁾。

ある抱握的統一体としての現実契機が生成するのは、先行するさまざまな契機によってであり、しかもそれらをその契機特有の仕方一点に凝縮し、潜勢態としてのもろもろの契機を現実態とする特殊な限定である。ある契機 a はその限定が生成する前にあった他の契機によって制約されるがゆえに、現実態として、過去を内在し顕示する。そして、契機 a として限定する過去のもろもろの契機を有機的に統一し新しい出来事を生成する（創発することによって、新たなパターンをつけ加える。存続する事物のない集合体もありうるが、持続する集合体なくしては、当然存続する事物はありえない。こうして潜勢態としてのもろもろのパターンから、ある現実態としての出来事が実現するまさにその時に、時間と空間が分かたれる。

ここにホワイトヘッド独自の空時分離論が完成する。

時間を細分化するという抽象化においては、時にそれを、無限小に分断可能な物理的に普遍的かつ一義的な一瞬間 (instantaneous moment) ととらえがちであるが、そうではなく、ある幅をもち、出来事を構成する諸要素が互いに接触しながらパターンが継起する場によって細分化するべきである。なぜなら出来事は、このパターンがある決まった時間経過を含みつつ持続し実現する（潜勢態が現実態となる）ことによってしか存在できないから。出来事の実現にはパターンが必要であり、パターンが現れるためには「持続の全体が空間化される（すなわち、停止される）ことを必要とする²⁹⁾」。

このようなパターンの実現に必要な空間化とパターンの持続に必要な、あるまとまった時間経過を含んだ場、このような具体的な出来事と出来事の間にある接触関係を示すにすぎないきわめて抽象的な場を、ホワイトヘッドは流動停止の「エポック的持続」(epochal duration) と名づける^{30, 31)}。ある出来事が実現し、また別の新たな出来事が実現する。そうやって出来事が次々と継起しつづけることで時間が生まれる。しかし、それらある出来事は、単に一義的で絶対的な空間の領域 B において一定期間 C のあいだ位置を占めているのではなく、ある立脚点 A である現実契機 A が、ある出来事がある領域 B において一定期間 C のあいだ位置を占めるという様態をもって抱握したものであることを忘れてはならない。

時間とはまったくエポックをなすもろもろの持続の継起にほかならない³²⁾。

このようにして時間とは、もともと可分であって接触している諸要素の継起である。持続は、時間的なものと成るときそうなることによって、ある持続的事物の実現をもたらす。時間化とは実現である。時間化は実現と離れた連続的過程ではない。それは原子状をなすものの継起である。こうして時間化されたものは可分であるが、時間は原子状をなすもの（すなわちエポックをなすもの）である³³⁾。

変転し続けるもろもろの持続するパターンの統一体である出来事を細分化し、「エポック的持続」の瞬間の契機 a としてとらえなおす。すると、当然ある持続するもろもろのパターンによって実現した出来事の契機 a は、自らを構成する諸要素の過去によって限定されつつ実現した統一体であるという、それまでは潜勢態もしくは可能態として内在していた諸契機との関係が現実態としてたちあらわれる。現実契機 A によって抱握された契機 a を含むもろもろの出来事の継起によって時間が生まれるのであるから、そのような時間は現実契機 A 独自の時間系であり、他の時間系との関係は常に相対的なものである。

また、この時間の抱握について、ホワイトヘッドは『観念の冒険』第十二章の過去、現在、未来においては以下のようにあらわしている。

未来が現在に内在しているのは、現在がそれ自身の本質のうちに、それが未来に対して持つだろう諸関係を担っているという事実のゆえにである。それによって、現在はその本質のうちに、未来が順応しなければならぬもろもろの必然性を含んでいる。未来は現在のうちにあるが、これは諸事物の本性に属する一般的事実としてである。それはまた後続しなければならぬ特殊な未来に賦課することが、特殊な現在の本性に内属しているといった具合に、一般的に限定されて現在のうちにある。このこといっさいが、現在の本質に属しており、そしてこうして限定された未来は、現在の主体的直接性における抱握にとっての客体を構成する³⁴⁾。

しかし未来の現在における客体的存在は、過去の現在における客体的存在とは異なっている。過去の種々の特殊な契機は現存在している。そしてそれぞれが現在における抱握にとっての客体として機能し

ている。過去の現在的諸契機のこうした個々の客体的存在は、それぞれがそれぞれの現在的契機のうちに機能しながら、作用因である因果関係を構成している。しかし未来のうちには、すでに構成された現実的契機は、存在しない。したがって、現在において作用因を行使する現実的契機は、未来のうちには、存在しない³⁵⁾。

6. 《かつて＝そこに＝あった》ポーズ

ここにロラン・バルトの『明るい部屋』(*La Chambre claire: Note sur la photographie*, 1980) における写真論を挟もうと思う。

つまり、「写真」の本性の基礎をなすもの、それはポーズである、と。そのポーズの物理的な持続は大して問題ではない。

一秒の百万分の一の時間（H. E. エジャートンが撮影した一滴のミルクの場合）であっても、ポーズは必ず存在したのだ。というのも、ここでいうポーズというのは、撮影対象の姿勢のことでも、「撮影者」の技術〔露出〕のことでもなく、写真を読み取ろうとする《志向》の終点にあるものだからである。一枚の写真を眺めるとき、私の視線のうちには宿命的にある瞬間についての思惟が含まれている。その瞬間には、どれほどの短いあいだであっても、ある現実のものが目の前でじっと動かずにいた。私は写真の現在の不動状態を過去の撮影の瞬間に転嫁するのであって、ポーズを構成するのはまさにそうした停止である³⁶⁾。

変転しつづける出来事が、ある瞬間においてせき止められ、現在との関係を断ち切られた不思議な停滞、一時停止をしたまま、ここ・今に持続する。バルトによれば写真の本性は、指向対象（被写体）が「現実のものでありかつ過去のものである、という切り離せない二重の措定³⁷⁾」である。バルトはさらに、この《それは＝かつて＝あった》という二重の措定の基礎をなすものが「ポーズ」であるとする。この「ポーズ」(pose) は単なるモデル（被写体）の姿勢でもなく、撮影する側の技術でもない。そうではなく、見る者自身の《志向》(intention) と関わり、その最後の結末、結果としての終点 (terme) に位置するというのが、バルトにしたがうならば、その順序は以下の通りであろう。「今、私の目の前にあるこの〔写真〕はこうやってじっと動かずにいる。かつて私もしくは誰かがシャッターを押したその瞬間には、たとえ

どれほど短い時間だったとしても、まさにこの「写真」と同じように、目の前にあった現実のものは、確かにじっと動かずにいたはずだ。」

本来はまったく別のことであるはずの、今日の前にある写真に感覚する不動状態と、シャッターを押す時に目の前の現実のものに感覚した不動状態を重ね合わせる。それは写真の現在の不動状態「停止 (arrêt) a」と、撮影の瞬間に目の前の現実のものに感覚したはずの不動状態「停止 b」をそれぞれに客体化（抽象化）し、より高次の上位概念もしくは類概念としての「ポーズ」(pose) の地平に収めてしまう、「ある瞬間についての思惟」による帰納と演繹を用いた同位化作用こそが写真の本性の基礎だ、ということではないだろうか。

つまり、「写真」としての化学変化による模様（＝指向対象）の現在の不動状態「停止 (arrêt) a」を感覚した上で³⁸⁾、「写真」として同位関係にある他の模様（＝指向対象）にも不動状態を感覚できることから、目の前のもの（＝指向対象）すべてには、一層高次の抽象としての上位概念あるいは類概念「ポーズ」(pose) があったはずだ、と結論づける（帰納）。その上で、「ポーズが必ず存在したのだ」から、過去のある現実のもの（＝指向対象）の撮影の瞬間にも下位概念あるいは種概念としての「停止 b」はあったに違いない、と転嫁（演繹）する思惟の動き。ようするに、紙の上の模様（＝指向対象）が、現実のものでありかつ過去のものであった、とする写真の本性の基礎になるものが「ポーズ」であり、特殊で個別な各々の事物がじっと動かずにいた瞬間「停止 a」や「停止 b」を包括する上位概念もしくは類概念としての「ポーズは必ず存在した」と措定するがゆえに、過去の撮影の瞬間「停止 b」《それ》が《かつて＝あった》し、また指向対象《それ》が《かつて＝あった》ということではないか。このようにとらえることによって始めて、「ポーズの物理的な持続は大して問題ではない」し、「ポーズ」が「《志向》の終点にあるものだからである」というバルトの表現も理解ができる。また、バルトが「ある瞬間についての思惟」と思惟の指向する「瞬間」そのものを曖昧に表し、かつ「どれほどの短いあいだであっても」と、不動状態の長さにあえてある不特定性もしくは不鮮明性をもたせた上で、最後に「ポーズを構成するのはまさにそうした停止である。」とわざわざ停止 (arrêt) とポーズ (pose) を使い分けたことにも納得がいく。

「写真」のたぐいえない特徴（そのノエマ）は、誰かが血肉をそなえた指向対象、あるいは個人としての指向対象を目撃したという点にある（たとえ指向

対象が事物であってもそうである）、と言ったほうがよいのだ³⁹⁾。

写真が類同的であるかコード化されているかを問うことは、分析の正しい道ではない。重要なのは、写真がある事実確認能力をもっているということであり、「写真」の事実確認能力は対象そのものにかかわるのではなく、時間にかかわるということである⁴⁰⁾。

このようにバルトの《それは＝かつて＝あった》という二重の措定は、ある現実のもの（指向対象）の視覚的形態と紙の上に定着している模様との類同性や写真のコード化に着目するのではなく、むしろ「私」を含む誰かが「指向対象を目撃したという点」であり、「時間にかかわるということ」に着目するべきとの指摘は、写真を介したある現実のもの《それ》が《かつて＝あった》という感覚は、単に空間においてある位置を占める物質としての対象そのものにかかわるのではなく、思惟による帰納法と演繹法を採用して写真を読み取ろうとする《志向》をもった者にかかわることを告げているととらえなおすことができる。

7. エポック的持続とシャッターチャンス

撮影者がシャッターボタンを押すのもまた、やがて撮影者自身が写真を手にしたその時に《それは＝かつて＝あった》と感覚することをすでに知っているからそうするのであって、まだ見ぬ未来への期待と予測なくして人はシャッターボタンを押しはしない。

しかも、シャッターボタンを押す瞬間は、変転する出来事のいついかなる瞬間でも良いわけではない。ある出来事の象徴的な瞬間、つまり、変転しつつける出来事のうち、撮影者によってある統一体として抱握された「ある現実のもの」が、目の前でじっと動かずにいたと感覚できるにちがいない決定的瞬間を目指してシャッターボタンを押す。別の言い方をすれば、撮影者にとっては、単に何十分の一秒などという物理的な一瞬間 (instantaneous moment) をとらえようとしているのではなく、成長することの姿、楽しい友人たちとの過ぎゆく時間、そういったある諸要素がパターンを形成し存続する出来事の、あるエポック的持続 (epochal duration) の瞬間としての契機 a を「写真として」残そうとしたものであるはずだ。今この時こそ、ある現実のものがじっと動かずにいる瞬間であり、それはある現実のものが実現しつつあるまさにその瞬間であると同時に、この瞬間こそが過去の諸契機が現存在し、かつ未来の諸契機をも内在した

瞬間であることを期待してシャッターボタンを押す。「シャッターチャンスを逃す」とは、そのように感覚することが期待できない瞬間にシャッターボタンを押してしまったということだ。

このシャッターチャンスとして感覚する瞬間こそ、つまりは現実契機 A としての撮影者のうちに諸相が有機的に関連し合い、統一的様態としてある出来事が実現したエポック的持続の瞬間の一つなのであって、その瞬間を空時においてさらに細分化してしまえば、もはや撮影者と《それは＝かつて＝あった》と抱握されるべきある出来事を結びつけるものは何ものも顕示されえない。なぜならば、その出来事の実現に必要な、原子状の有機的なつながりをすでに分解してしまっているのだから。被写体をそぎ落としすぎてしまったフレーミングや、何万分の一秒という超高速度シャッターによる写真が、ある出来事の再現ということにおいて、時に撮影者の満足を引き出せないことはこのことを証しする。

その逆もまた同様であろう。広すぎるフレーミングや余計な被写体の挿入、あるいは低速度シャッターなどによって、ある出来事の生成においては直接的にはさして影響を与えないパターンをも写真に収めてしまえば、撮影者がここ・今においてもろもろのパターンの統一体として抱握したはずの、ある出来事のエポック的持続の瞬間が、他の出来事をも含めた複合体からは十分に分離できていないのだから⁴¹⁾。

シャッターボタンに指をかけるその瞬間に、撮影者はこの行為によって「写真」という出来事が生成するにちがいないという自らの行為の客体化を通じ、まだ見ぬ未来を予期し、その未来が順応しなければならぬもろもろの必然性をのちに証しすることを予期し、シャッターを切る。それは同時に、撮影者にとって、諸相をもち持続しつつ変転する出来事の複合体に対し、ここ・今において、「写真」という出来事の実現に向けて自らが自覚的に積極的に関与しようとする行為であるゆえに、まさにこのシャッターボタンに指をかける所作そのものが、あらたなパターンが実現する場（エポック的持続の瞬間）の一つでもある。

写真を見る者にとっては、すでに、あるいはもともと空間的にも時間的にもある位置を占めるという具体的な経験事実としては抱握不能である過去の撮影の瞬間という出来事に対し、光の作用による化学変化としての模様のある紙を、誰かによって遺された似姿、痕跡、しるしのようなものとして《それは＝かつて＝あった》という二重の措定の本性をたたえた写真として抱握することで、写真という具体的に持続する出来事を介し、抽象的にで

はなくまさに字義通りに具体的な経験事実として、ここ・今に再びもしくは新たに関与することができる。

それは、指向対象（被写体）という様態《それ》が、変転する出来事の過程として《かつて＝あった》と同時に、私もしくは誰かが、ある出来事を指向対象（被写体）という様態をもって抱握したこと《それ》が《かつて＝あった》こと惹起する瞬間でもある。そのことによって、ここ・今における私をふくむすべてのものが、様々な先行する出来事の限定のうちにあり、かつすべてのものが予期できぬ未来への過程にあることを抱握する瞬間でもあるだろう。

写真は、分子レベルにおいては、光を介したエネルギーの移動による化学変化としての模様という出来事が新しく実現したものであり、その意味で、光エネルギーによるエポック的持続の瞬間《それ》が《かつて＝あった》ことを現実態として示す。このように、出来事の今と過去と未来について、写真そのものが、抽象的にではなく人をふくむすべてのものを代表する具体的な出来事として、まさに現実態として客体化し顕示する⁴²⁾。

時に色あせ朽ち果てようとする、見知らぬ者によって遺された写真にすら感傷的になるとするなら、その時こそ、写真という客体を通じて多数の出来事の共存を、断絶し孤立したものとしてではなく、相互作用のうちにあるものとして覚える瞬間でもあるのだろう。

消滅してしまった存在の写真は、あたかもある星から遅れてやって来る光のように、私に触れにやって来るのだ。撮影されたものの肉体と私の視線とは、へその緒のようなもので結ばれている。光は触知できないものであるが、写真の場合、光はまさしく肉体的媒質であり、一種の皮膚であって、私は撮影された男や女とそれを共有するのである^{43, 44)}。

8. 抱握と写真－むすびにかえて

写真そのものは、フィルムや印画紙の表面に作用した化学変化による模様として、かつてカメラの前に起こりつつあった出来事との関与を物理的な現実態として持続する。そのことと同時に、時に被写体の微笑むまなざしの先にあるものとして、かつてその写真をとどめおくためにシャッターを切った撮影者という出来事もまた、潜勢態として持続する。

そしてこの化学変化による模様のある物質を誰かが手にするまさにその瞬間、その者によって、《それは＝かつて＝あった》という過去をたたえた、シャッターボタンを押した誰かによって遺されたにちがいない、「写真」

という統一された現実態の出来事として抱握されるのだ。

もともとその者の手の中に、単にそれ自身としてある写真という物質性をともなった画像が位置を占めていたのではない。その者によって紙という物質が抱握され、化学変化による模様が抱握され、それが何かを示す「画像」として抱握され、それが光学的にとらえられた画像であると抱握され、画像の背後にある潜勢態としての撮影者が抱握される。そうやってそれらもろもろの出来事を有機的に統一した結果としての「写真」という様態をもって抱握されるのである。

ホワイトヘッドのエポック的持続による空時分離論を写真に適用するなら、写真を撮る時、そして見る時、まさにその時こそ、「写真」というものを抱握することを介し、潜勢態としてのここ・今、過去、そして未来という時間そのものが客体化され生成する、エポック的持続の瞬間ととらえることができるであろう。

写真という一枚の静止画像が人を魅了するとしたら、それは時間の抱握によってここ・今をとらえる、人間の精神という単一的現象そのものの客体化と抽象化にたどり着くのではないだろうか。

注

- 1) ここでいう作者とは、写真撮影を担当する写真家だけでなく、広く記者、編集者、出版社といった複数の人間によって構成されている共同体をも意味している。
- 2) 田中裕著『現代思想の冒険者たち第2巻 ホワイトヘッド—有機体の哲学』講談社、1998年、88-92頁
- 3) Cf. Alfred North Whitehead, *Science and the Modern World*, Cambridge University Press, First paperback edition 2011, p. 70 (アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド著、上田泰治・村上至孝訳『ホワイトヘッド著作集第6巻 科学と近代世界』松籟社、1981年、74頁参照)
- 4) Ibid., p. 22 (邦訳同書、23-24頁)
- 5) Ibid., p. 75 (邦訳同書、79頁)
- 6) Ibid., p. 64 (邦訳同書、67頁)
- 7) Ibid., pp. 80-81 (邦訳同書、85-86頁)
- 8) 同書 p. 86 (邦訳同書、92-93頁) において「抱握」を以下の通り定義する。ホワイトヘッドの有機体の哲学を構成する重要なキーワードのひとつ。
「知覚（ないし表象）する（perceive）という言葉の中には日常の用法では、認識の把握という概念が強く貫いている。把握（apprehension）という言葉も同様であり、それには認識的（cognitive）という形容詞が付いていないときでさえそうである。わたくしは非認識的把握（uncognitive apprehension）に対して、抱握（prehension）という言葉を用いようと思う。この言葉でわたくしの意味することは、認識的でもあり、またそうでないこともありうる把握である。」
- 9) Ibid., p. 80 (邦訳同書、85頁)
- 10) Ibid., p. 116 (邦訳同書、128-129頁)
- 11) Ibid., p. 130 (邦訳同書、144頁)
- 12) 同書 p. 129 (邦訳同書、143頁) において「永遠的客体」（eternal object）を以下の通り定義する。これもまた有機体の哲学の重要なキーワードのひとつ。

「このようにもろもろの出来事が解け合うことは、自然の成立に必要であるが自然からは出てこない永遠的客体の、例えば色、音、匂、幾何学的性質、などの諸相に由来する。そのような永遠的客体は一つの出来事の成分であり、他の出来事を限定する姿ないし相として現われるであろう。」

現実契機に「進入」することで出来事に諸相を与えるものであり、かつすべての現実契機に対してさまざまな進入様態がありつつも、つねに同一の自己を保つものであるが、永遠的客体自身の本質を含まないままに現実契機との諸関係が表わされうる「孤立」した可能態とする。

続く著書『過程と實在』においては、「現実的存在の生成の中へ『侵入』するその可能態に特有の言葉によってだけ記述され得る、純粹の可能態」（Cf. *Process and Reality*, p. 23 [邦訳同書32-33頁参照]）とある。感覚的客体はこの範疇に含まれる。

- 13) Ibid., p. 130 (邦訳同書、144頁)
- 14) Ibid., pp. 184-185 (邦訳同書、199-200頁)
- 15) Ibid., p. 186 (邦訳同書、201-202頁)
- 16) Ibid., p. 88 (邦訳同書、94頁)
- 17) Ibid., p. 88 (邦訳同書、94-95頁)
- 18) Ibid., p. 88 (邦訳同書、95頁)
- 19) Ibid., p. 89 (邦訳同書、96頁)
- 20) Ibid., p. 87 (邦訳同書、93頁)
- 21) Ibid., p. 87 (邦訳同書、93-94頁)
- 22) Cf. *ibid.*, pp. 132-133 (邦訳同書、145-146頁参照)「基体的（抱握）活動力」（underlyins activity）とは、いかなる実在からも離れつつも永遠的客体がまとまって出来事として実現する過程において実在的に共存するものといえ、個々の思惟の成立地盤であるとする。フッサールは『論理学研究』において、作用を「作用性質」と「作用質料」に二分したが、ホワイトヘッドの形而上学的「基体的活動力」とこのフッサールの現象学的「作用性質」との比較についてもいずれ考察してみたい。
- 23) Ibid., pp. 87-88 (邦訳同書、94頁)
- 24) Ibid., p. 159 (邦訳同書、173-174頁)
- 25) Ibid., p. 150 (邦訳同書、164-165頁)
- 26) Ibid., pp. 218-219 (邦訳同書、237頁)
- 27) この「創発」（emergence）についてのホワイトヘッド自身による明確な定義は『科学と近代世界』においては見あたらないが、訳者の上田泰治によれば、ホワイトヘッドは『科学と近代世界』の序文において、ロイド・モーガンの『創発的進化』およびアレグザンダーの『空間、時間、神性』を挙げていることから、このふたりが共有した対概念「resultant と emergent」を援用しているとした上で、この対概念を以下の通り概略している。「混合物の性質はその構成要素より予見される、つまり、そこには構成要素に還元できないような新しい性質は存在しない。そういう混合物はその構成要素の resultant なのである。それに対して、emergent はその生起に先立って存在する構成要素の性質より予見できない性質を含む。つまり、emergent はその構成要素の数学的和を超越したもの、従って構成要素に対していえば単なる量的発達ではなく質的変化を得たものである。」(邦訳同書内「訳者あとがき」、330-331頁)
- 28) Ibid., p. 219 (邦訳同書、237頁)
- 29) Ibid., p. 169 (邦訳同書、184頁)
- 30) Ibid., p. 157 (邦訳同書、171-172頁)
- 31) 先行する『自然という概念』（*The Concept of Nature*, 1920）においては、ホワイトヘッドは出来事をつぎつぎと分割した先にある、出来事を構成する空間的延長も時間的延長ももたない抽象集合の群を、「点-閃光」（point-flash）もしくは「出来

- 事粒子」(event-particle)と名づけていた。また、のちの『観念の冒険』においては「点-出来事」(point-event)と名づけてもいる。
- 32) Ibid., p. 158 (邦訳同書、172頁)
- 33) Ibid., p. 159 (邦訳同書、174頁)
- 34) アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド著、山本誠作・菱木政晴訳『ホワイトヘッド著作集第12巻 観念の冒険』松籟社、1982年、268頁
- 35) 同書、268-269頁
- 36) Roland Barthes, *La chambre claire: Note sur la photographie*, Cahiers du cinéma gallimard seuil, 1980, p. 122 (ロラン・バルト著、花輪光訳『明るい部屋』みすず書房、1985年、96頁)
- 37) Ibid., p. 120 (邦訳同書、93-94頁)
- 38) バルトにしたがうならば、「写真」は指向対象と密着しているため、瞬時にこの感覚は「指向対象そのものが紙の上に不動状態で記録されていると感覚する」ということと直結する。そのためにこの両者の感覚はほとんど同義だろう。
- 39) Ibid., p. 124 (邦訳同書、97頁)
- 40) Ibid., pp. 138-139 (邦訳同書、109頁)
- 41) ここからスピノフして、ある出来事の再現において必要な有機的なつながりをあえて積極的に分断したり余計なものを加えたりして、写真を用いて本来の意図とは別の新たなつながりを発見しようとする逆転の発想と行為が生まれるのではないだろうか。つまり、ある現実契機によってある出来事を構成するあるエポックの持続を把握した瞬間に、その現実契機独自の時間系が生まれるが故に、そのような写真を用いた逆転行為は、「私自身」という現実契機による把握以外の、別の現実態としての出来事の可能性、つまりは「私自身」とは別の時間系を感覚することを求める行為といえるのではないか、と考える。
- 42) バルトは「生命のある有機体と同じように、「写真」は発芽する銀の粒からじかに生まれ、しばしのあいだ花を咲かせ、やがて年老いてゆく。」と写真の生成から消滅にむけたプロセス

- についても言及している。(Ibid., p. 145 (邦訳同書、116頁))
- 43) Ibid., pp. 126-127 (邦訳同書、100頁)
- 44) さらに家系という血のつながりを写真に認める経験を語っている箇所も、ホワイトヘッドとの類似性を考える上では大変興味深い。(Cf. ibid., pp. 160-164 (邦訳同書、128-130頁参照))

参考文献一覧

- アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド著、平林康之訳『過程と実在 コスモロジーへの試論1』みすず書房、1981年
- アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド著、上田泰治・村上至孝訳『ホワイトヘッド著作集第6巻 科学と近代世界』松籟社、1981年
- アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド著、藤川吉美訳『ホワイトヘッド著作集第4巻 自然という概念』松籟社、1982年
- アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド著、山本誠作・菱木政晴訳『ホワイトヘッド著作集第12巻 観念の冒険』松籟社、1982年
- アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド著、平林康之訳『過程と実在 コスモロジーへの試論2』みすず書房、1983年
- 田中裕著『現代思想の冒険者たち第2巻 ホワイトヘッド－有機体の哲学』講談社、1998年
- 中村昇著『講談社選書メチエ ホワイトヘッドの哲学』講談社、2007年
- ロラン・バルト著、花輪光訳『明るい部屋』みすず書房、1985年
- Alfred North Whitehead, *Process and Reality: An essay in Cosmology*, The Free Press, First Free Press Paperback Edition 1985
- Alfred North Whitehead, *Science and the Modern World*, Cambridge University Press, First paperback edition 2011
- Roland Barthes, *La chambre claire: Note sur la photographie*, Cahiers du cinéma gallimard seuil, 1980